

翻刻『かたがたのせうそこうつし』

野 本 瑠 美
 (島根大学法文学部)

摘 要

手銭家七代当主の妻・さの子が写した書簡集『かたがたのせうそこうつし』を翻刻、紹介する。

キーワード：手銭さの子、富永芳久、消息、手銭記念館

はじめに

出雲市大社町の手銭家が所蔵する『かたがたのせうそこうつし』は、手銭家七代有頼の妻・さの子(一八一三〜一八六二)が富永芳久や中臣正蔭らと交わした消息(手紙、書簡)の写しである。

手銭さの子は今市の直良家の出身で、文政九年(一八二六)手銭有頼に嫁いだ。中臣正蔭・田中清年、富永芳久らに和歌、俳諧を学び、千家尊澄とも交流があった。

『かたがたのせうそこうつし』は、安政五年(一八五八)四月から文久二年(一八六二)七月にかけて交わされた消息三十一通の写しであり、おおよそ年代順に書写されている。なお、最後の消息③は文久二

年七月末日の日付が記されているが、さの子は翌八月に急逝している。以下に消息の日付・宛先・差出人の一覧を掲げる。

〔消息一覧〕

通し 番号	年 月 日	宛 先	差 出 人 (書簡筆者)
①	安政五年4月9日 4月中旬	さの子	富永芳久
②	4月末日	さの子	富永芳久
③	4月末日	さの子	佐草文清
④	5月1日	さの子	佐草文清
⑤	5月17日	富永芳久	さの子
⑥	6月13日	富永芳久	さの子

通し 番号	年月日	宛先	差出人 (書簡筆者)
7	6月24日	さの子	富永芳久
8	5月末日	さの子	よしのぶ
9	9月	さの子	田中清年
10	10月3日	さの子	富永芳久
11	11月5日	さの子	富永芳久
12	9月25日	さの子	富永芳久
13	10月12日	さの子	中臣正蔭
14	11月9日	さの子	富永芳久
15	7月末日	佐草文清	備前国玉樹子 (安原玉樹)
16	安政六年正月一日	さの子	中臣正蔭
17	2月	とよ子	さの子
18	5月	さの子	田中清年
19	5月2日	田中清年	さの子
20	5月	さの子	田中清年
21	正月	母	さの子
22	正月十日余り	さの子	富永芳久
23	文久元年9月20日	さの子	富永芳久
24	11月21日	さの子	富永芳久
25	11月22日	富永芳久	さの子
26	12月20日頃	さの子	富永芳久
27	正月15日	富永芳久	さの子

通し 番号	年月日	宛先	差出人 (書簡筆者)
28	文久二年正月9日	さの子	中臣正蔭
29	正月10日	中臣正蔭	さの子
30	4月末日	中臣正蔭	さの子
31	7月末日	さの子	中臣正蔭

本書の筆跡から、同一人物(手銭さの子か)の手による書写と思いが、ところどころ筆致の変わる部分があり、幾度かに渡って書き継がれてきたものであることが推測される。

手銭家には『かたがたのせうそこうつし』の他に、『ちとせの舎御せうそこ』と題された、千家尊澄と思しき人物からの書簡等を書き写した本、さの子の書簡の下書を取めた『心中心おほへ』等も存している。これらの書簡については、田中則雄氏^②によってその内容の一部が紹介され、さの子の歌文の創作やそのための学び、さの子周辺での文芸をめぐる遣り取りなどの様が窺えることが指摘されてきた。「消息」は単なる通信文ではなく、文芸活動と密接に結びついた所産なのである。

本書は江戸時代後期の大社地域の文芸活動の実態を伝える貴重な資料と言えよう。手銭家に残された添削詠草類にほとんど名が見られない女性歌人(「とよ子」(吉見豊子^④)など)との交流が確認できるほか、⑥⑦⑱⑳の書簡にさの子の母(直良みき子^⑤)が登場し、さの子の文学的素養の形成を考える上でも示唆に富む資料である。また、佐草文清のもとに届いた安原玉樹^③の書簡も書写しており、本書が単なる備忘録ではなく、雅文執筆の手本として書き記されていたことも推測

され、歌文創作の学びの様を窺うことができる。加えて、大社の歌人と備中（書簡では備前）の女性歌人との交流も知られ、江戸時代後期の大社圏に留まらない文芸交流の実態を知る資料としても極めて重要である。

書誌

手銭家所蔵 写本袋綴一冊。

〔表紙〕二・三×一六・七糎。紺色。

〔外題〕表紙左上に題簽「かた／＼のせうそこうつし」

〔内題〕ナシ

〔丁数〕三七丁

〔備考〕一面の行数は不定。一丁～二丁オに、「四段の活」「二段の活」などの動詞活用表、二丁ウ～二六丁までが消息写し、二七丁～三六丁オは白紙、三六丁ウ～三七丁オにはイロハ歌と拗音等の表記例一覧、三七丁ウには十千の訓が記されている。

凡例

一、翻刻にあたり、私に句読点を補い、改行位置を改めた。また、概ね通行の字体に改めたが、一部原本の表記を残した。

一、便宜上、各消息の冒頭に通し番号を丸数字で付し、各消息の間は一行空けた。

一、原本の各丁片面の終わりに当たるところに「」をつけ、（）内にその丁数および表・裏（オ・ウ）を示した。

一、ミセケチ記号は「ヒ」で示した。

一、墨消ちは、下の字が判読可能な場合は二重線で示し、判読不能な

場合は■で示した。重ね書きや補入については、訂正後の本文のみを翻刻した。

翻刻

①安政戊午年 芳久大人のせうそこ

梓弓春たちしよりととは、いまさらにひき出むもことふりにたれと、柳桜もいつのまにかをりすきにけん、いかにへあることの葉をそへ給ふらんとおしはかりつゝ、なん。此ちかきわたりにては郭公さへさとひたるを、ひかりことなる玉すさのうへにもらし給へる聲の色さへいかにありけんとさらにおとろかれ侍りぬ。はたひと日、民平にもせし風土記をむつたまあへるみやひ男にゆつり給ひて、そのあたひ十八ひらおこせ給ひ、すなはち書りんへ遣すへうなん、このふみよ天の下にたくひなきふることの傳はりきぬるを、世にする人もまれになるはうれたきことのきはみなるに、去年よりかなたこなたと人にもあたへしらしめこゝろはへのふかきこと、古しのふるおのれらか心にはなそへなくうれしう（2丁ウ）なん。そもく、今はふみ見る道のひらけいたりて、はるかなる西洋のおらんだなといふ国の世のはしめのつたひ書にも、国のはしまりは亜細亜よりひらけしよしにつたへ、天竺、またちかきもろこしにても帝震に出つなといふ傳へのありて、いつれの国にても皇国よりひらけはしまりけることはいちしるく、いともく／＼のめなるましき神代の傳説なるを、なほさりに見すこす人はいかなる心にかとおもひやられ侍れとも、さてはおのれ何はかりのことしたりかほに人のおもはんかとのやましくて、た、うちとけたるなからひのみにてなん。あしたゆふへとあちはひてみたまへ。国ひきまし

くふることにいとおほきなるつたへなるに、のちの世にもこの四郡を浪にかひ来し山とて浮浪山などいひつたへたるもをかき悉ならずや。猶おなしこゝろさしならん人にはひろくしめし給ひぬ。此国の光を世にてらすのみにはあらず、すへて皇国のためのいふもさらなり、いひもてゆかは、四海」（3丁オ）萬国のためともなりぬへし。さるは萬国のひらけはしまりしもとづくにの世のはしめの傳へ、実にして、その国しろしめす限、一神の大御心よりそをうしなそしはふらさしとつたへさせ給へる法書なればなり。あなかしこ。えみしのたてまつれる千字文や何家々ひとしなみにいふへきふみにはあらぬをや。あななくたゞしはいひさまや。何事もうちくゝに罪ゆるしたまへ。さてもめつらかなる大御酒、その神のかみし御酒いくひさしとことほきつゝ、かもし給ひけんを、ひとかめおこせ給ひのこともつとへて、たるそこのうちもやくにうたけし侍らんと、よろこひ聞へさせんにもみちかき筆には中々になん。なほむらいの罪はおしはかり給ひてゆるしたまへ。あなかしこ。

卯月九日

よしひさ

さの子君の御もとに」（3丁ウ）

②卯月中比同し人の御かへし

ひと日はこまやかなる御消息給へりしを、おほやけことしけくてなん、罪ゆるし給へ。さても歌仙のしりへ書、おもしろくもをかしくものし給へるかな。もしは、かうもやとおもひ給ふるふしかい出侍りぬ。あらぬことには侍らんを、とり直し給ひていかてくゝとくゝおこせたまひぬ。蘿海ぬしの歌仙求す、いまた松江よりおこせ侍らすや。ことこのついでに、ひとりよろこひもつたへたまひてよ。はた此程、

すはうの国より五月はかりとふらひ来しみこの、かの国にも歌仙をなんえり出しとておこせ侍りぬ、をかきことも侍るものかな。これにつきても此度の歌仙をかゝの国へもとくゝ遣はさまほしくなん。けふもことしけくてかたはしを。あなかしこ。

さの子君

よし久」（4丁オ）

③佐草君のよりのせうそこ

橘のかげふむみちのたいらかにおはすらむ、ことしけくて、ほとゝきすの音つれもし侍らす、むらいの罪ゆるし給へ。さて、此ほどおくり侍りし巻の類のうた数くゝよみ出給ひぬらん、かれこれ集り侍ればしたゝめはやと思ひ給ふるに南。いかて此つかひにいたし給へねかし。よろつはたいめ給はりてこそ。あなかしこ。

ふみきよ

卯月はての日

さの子ぬしのもとに

おいつきてきこゆ。さいつ比ちきり侍りし玉樹の消息一ひらまるらするををさめたまうてとよ。

④おなし君より

つたなきはしりかきしてみけしき給はる、けふ」（4丁ウ）しも五月来ぬれはにや、空のけしき何とやらん五月雨の滴出へう打くもりたるは、心いふせくなかめられ侍るを、いかに見給ふらん。よへはこよなう酔しれたるとちかおひなくされはみたるを、いかににくしと見給ひつらん。申ひらく詞も侍らす、なめしのわさいない■たまへ。さても、ものことにこゝろおそくて、くらふの山をやこゝにこゆらんやうに、

むけにたとくしがる身の、おほけなくも消息などかくへきには侍らねと、さきつるおなし心にのたまはせたることうれしくて、蕙ひのかけはしふみゆかん、したの心を聞えさするに南。あさましととかめ給はずて、よきに見直し聞直し筆くはへ給ひて、こと人にはゆめもらし給ふなよ。かしこ。

五月一日

文清

さの子ぬしへ」(5丁オ)

⑤よし久君へ返し

さきつ日は、うるはしくこまやかなる御かへりこと見奉るさへ、いとかたしけなきに、まいておと、しの式百首めくませたまひ、いとくうれしう。此比は日々冊子見侍るに、おもしろき歌ともにて、わかえせうたのなきそ中々に心やすく侍る。こそにはをのかもくはひさせ給ふよし、いとつかしくとりかへしつへうもおもひ給ふるに南、はた五十歌仙のしりへかきも、清左君のつてにて君よきにはからひ給はりしよし、いとくうれしうは思ひ給へながら、あまりに月日たちし事ゆへ、先つ日の文にもわざとかきもらしつ。なほこのかしこまりはたいめ給はりて聞へたりぬへけれ。はた、いは見の国人のこふとて、うつくしきたにさくにをのかうたした、め侍らるやうのたまはずれと、さきつ日聞へさせつるやうに、こそより此春までもいそく事のみおほくてこしをれ一首たに■」(5丁ウ)よみはへらねは、したためたうたもすくなく手のあしきに、うたもをかしからねは、かへつて君のおもてふせにやと、さしひかへ侍りぬ。あなかしこく。

さつき

さの子

中のなぬか

翻刻『かたがたのせうそこうつし』(野本瑠美)

よし久大人のみまへに

⑥芳久君にかなつかひの事とひける折、遣しけり

水無月も名にもす降つ、き侍るを、君には何事かおはしますらん。一日はいとこまやかなる御かへし、殊さらをのかせう息のつたなきものを、心やましともおもひ給はて、いとねんころにかき入させ給ふな。海山ほともうれしう思ひ給ふる。をのか文かへしたるへうのたまひつれと、あれはかなつかひのたよりにし侍らんと思へ」(6丁オ)給ふれば、けふのも見直し給ひて御かへし給はれかし。一日の御消息は、母かもとへ遣し侍りしに、此かしこまりは、をのれよりあつく聞えたるへう、いひおこせ侍りぬ。さても此比は天満宮の御まつりまへにて、さそくことししくおはしさんとおしはかりたる、いかにおもしろき御うたやよみ給ふらんと、聞まほしう南おもひ給ふる。はた清年君の祝歌、いとこまやかに直し給はり、すなはち素鷲川のうたをした、め侍りぬ。とみにかへりことつかうまつるへきを、何くれとことしけくてうちすき侍りぬる罪は、ゆるし給ひてよ。

水無月

あなかしこ。

中の三日

おいつきてきこゆ。此しな、いとあやしう侍れと、たにさくつ、みにたにしたまひてよ。はた、手つくりの酒は、おほやけことのとまのひまにきこしめして、いさ、かいたつきをもなくさめ給は、いとく嬉しう南。」(6丁ウ)

⑦おなしく御かへし

みな月も廿日すきぬるに、さみたれのなこりさりかたうも侍るかな。

さて、ひと日はたにさくつゝみにとて、ふかみ草のかたすれる、いとみやひかなるに、名たゝる八重垣といふおほみきをさへたまはり、八重垣のひとかたならぬ御心のほとに、深見草のふかく嬉しう南思ひ給へ侍る。このよろこひは、すなはちに聞えまほしうおもひ給へながら、おしはかり給へるやうに、天満宮のみまつりにてとこそせき事しけてな、罪ゆるし給へ。いかて幣代の歌をたにとおもひ給へ侍れと、れいのいたりふかゝらぬきはにては、心はかりに南、母君のもとよりもあつき御こと葉そへ給へるへよし、いかてくゝ事のついでにとりなほし聞え給ひてよ。はた、いはひ歌は素鷲川のをかき給へるよし、いかにすかゝしうかきなかし給ふらんと、水荃のほとさへおしはかられて、あるしもさこそはうれ（7丁オ）しうよろこひ侍りめとぞ、聞えさせまほしき事は、むくらのまとのいとしけう侍れとも、けふも筆とるいとまなくてなん。かへすくゝもゆるし給へ。あなかしこ。

六月廿四日

よし久

さの子君

⑧これよりさきよしのふぬしより

打つゝき、いとみしうも降侍るかな。いふせしといはんもさらなり。ひととせの年も、かほとにやみなからふりつくすらんとはかり思ひ給へらるゝは、浅ましうなん。此つれくゝも、れいのみあそひ事なとせさせ給ひて、いかに君にはなくさめ給ふらん。おこかましふは侍れと、かゝる折などにはかならずさもらひて、何くれとをかしうし給むかし物語りも聞へたるへきを、さりかたき事の侍りてえまうて侍らぬは、くちをしうなん。さて、きのふはみやひ事のみあるしせさせ（7丁ウ）給ひし、折しも、まゐり侍りしかは、をのれにさへ寄人の

みものわたりを、みむしろのかたはしにて承るへく、あるし君のおほせかゝふり、おちなき身のおちもおそれて、はひかゝまり風流かなる事ともうけ玉はりしは、いとかたしけなうおもひ給ふる。まして、いみしきみくりや人のつくりけん海のも川のも、はた造事とつくらせ給ひし御酒をさへ、飛螢もひかりそひぬらん、沢水のさはくになさけあるさまにもせさせ給ひし、うれしとも嬉しうなん。酔すきぬれば、かへさの道もたどくしう侍りし。わきて老たるかためにとて、鯉てふうのをのしらいとのいとめてたうつくれるをめぐみ給ひし、おもひしもしるく、此うをたうへたらん日には髪すしたにみたれしとき、侍る。いまをたにあれはなど、ひとりこちつゝものし侍りしは、をのれか心にもまたなう南侍し。かくかすつもれるよろこひ、とみにまうのほりて聞えたるへきを、文してなど（8丁オ）いかになめしとおほし給ふらん、罪さり所なうおもひ給ふる。いかてひろきみこゝろにゆるし給ひてよ。なほことつきてきこへたらん事は、ゆふさりかけてさふらひてこそ。あなかしこ。

さつきはての日

よしのふ

さの子君の御まへに

⑨きよとし君の元より

きのふたいめ侍りて、聞えまゐらせしその、菊みくさまゐらする、白きはすさきの鷺、きなるはみちのく、みたれはふはの関とか、庵ぬしの市より聞へ侍りて南。さて、植置しまゝにて、おほしたてのあさはかなるにかあらん、いたくみおとりしてなん。かゝるみのは木かくれてのわさなれば、きはくしき冊子か、つらひては心にもまかせ侍らぬものなりと、これにつけてもいとなみのしけきをねたまはへるの

み。あなかしこ。」(8丁ウ)

長月けふ

きよとし

おくにかく南 さの子君

此人にならましかはとおもふかな

こゝなどにきくをつくりいて、は

千代は根にこもると菊の花なれば

みおとる色をうとむへしやは

なとまけ侍らぬ口すさひをなんいひ出て聞えまゐらす。

⑩ 楯の舎君のもとより

うちそゝくしくれの音におとろかさされて、朝戸あくれば、さためなき
空にも、折をたかへす冬は来にけりとうちなかめられて南。やうく
あさ日のさしのひるまゝに、なこりなうはれわたりて、残れる菊のし
ら露も千歳をかねたる恵みのさかへをみせ、小春とかふらんもことは
りにこそ。かゝるをりには、君にははれいのこと葉の玉をは匂はせ給ふ
らん」(9丁オ)と承はらまほしう南、月比いか、おはするにか、こ
としけくておこたり侍る罪、ゆるし給へ。此ほとは、みやこの書やよ
り、とりくゝにめつらかなる書ともみせ侍るを、さこそは御めにとま
れるふみのおほかりなめとおしはかり侍りてなん、契中の和字抄、守
部かこゝろのたね、芳樹かうたかたりなど、めつらしことには侍らね
と、いさゝかと、のひ侍りぬ。めとまるふみともは、しろかねのあた
ひ侍らねはみさして南。さてもへつにねきまゐらすをちく、いか
てくとりなほし給へてよ。おのれさふらひてたに、と思ひ給ふれと
も、おほやけことしけくて、むらいの罪はかへすくもゆるし給ひ
てよ。

翻刻『かたがたのせうそこうつし』(野本瑠美)

神無月

よしひさ

三日

さの子君にまゐらする

⑪ おなし人より

あしたの霜、よその嵐にも何事かおはすらんと思ひ給ふるものから、
さてもさても、ひと日かたらひ侍りしこともよ御思ひやり」(9丁ウ)
のいたらぬくまなくはからはせ給ひしによりて、すみやかにことなり
をへしよろこひは、千重のひとへもすなはちに聞へさせまほしう思ひ
給へなから、よるひると大江戸へ来ん年のほきことより祈宮のねきこ
となとかねさせ給へるいそぎに、れいよりはいと、事しけくて、心よ
り外におこたり侍るつみ、ざりとこゝろなくなん。いかてく直良君へ
も千重も五百重もとり直しよろこひ聞え給ひてよ。はた、としこゝろく
ゑんしの物語をとりくゝに注釈ともつとへて御らんし給ふよし承り
ぬ。見ところあるには侍らさらめと、これは藤垣やのひめまきにて、
こすゝの舎翁の講説のき、書なるを、おのれこひえてうつしぬるに、
細代翁のさとし言をもかきくはへてひめもたるを、御らんせさせ侍り
ぬ。あきらめ給ふかたはしのたよりにもならましかは、いかにうれし
からまし。なをなほ雨夜のものかたりのをも見給は、おひすかひ御
らんせさすへし。としこゝろはひめおきて、教子にも見せ侍らねは、お
しはかり給ひて、かならずこと」(10丁オ)人にな見せ給ひそ。かた
くなのいひくさやといとひ給ふらん、ことわりはつ、ましかれと、け
ふもいとまなくて、たゝよるこひの一言をたにと、みたりかはしさを
もかへりみす南。あなかしこ。

しもふる月五日

よし久

さの子君の御もとに

⑫おなし人前のふん

風のおと虫の音も、あさゆふわひしうのみなりまさり侍るかな。君にはかゝるをりのあはれをもすてたまはず、いかにみやひかなること葉の玉もみかき給ふらんと、おしはかり侍^りてなん。さてもひと日は、八雲の御うたにやたくへ給ひけん、名たゝるためつ酒に、ちはやふる神のきりけん枝にはあらてぬしさまにつくれるさかなをさへそへて給はりしよろこひに、すなはちもきこへさせまほしうおもひ給へながら、筆とることもいとほしくてうちすきぬるまに〜」（10丁ウ）罪ゆるし給へ。はた、こゝに三十六歌仙のしりへかきおこせ給ひ、いとまめやかにい出給ひにけりとあはれにおむかしうなん見たたへ侍る。けに何某君たちのたまへ侍やうに、此国のめいほくに南、いかて〜とく〜かいつけ給へ。やかてゑり下書にもつかはすへうなん。あなかしこ。

九月廿五日

佐野子君御もとに

よしひさ

⑬中臣君のもとへ菊見にまうて、のち、よろこひの消息遣しけるかへし

さいつころは御消息給はり、とみにもとみにもかへりこと申へきを、此ほど陸奥より安藤太仲といふはかせとふらひ来て、何くれと物語せんとて打すて置侍る罪ゆるし給てよ。扱、桜井氏に廿年余りのいき、たへたるを、つたひふりはへてまかんでたれば、めつらしうあるし」（11丁オ）せさせ給ひて、七日はかりいにしへ今のこと、も物語て、

やう〜やとにかへり侍るになん。はた菊見にとめつらかにおはしけるを、あはらなる住家のあれたる中に、すさまじきあるしまうけにて、いまにあかす口をしうなん。家刀自には何くれと家つと給はり、その、ちも菊の下水御送り給はり、こよなううれしうおもひ給ふる。その折ふし、鴨の背はしたなきものながら、夜毎のすさひになりしよし、いと〜嬉しう南、菊のうたかす〜よみ給ひてよと、たいにきくの名をものしおくりたるとなん。なほこのかしこまりは又こそ。あなかしこ。

時雨月十日余二日といふ日

正蔭

さの子の君

⑭楯の舎君よりかへし

五日の御かへりをたにとおもひ給へながら、このほどは御斎の神事のものしるより、大江戸へ参ん春のつかひさね」（11丁ウ）のいやしろ、何くれとさしつとひて、よるひるとなくおほやけことしけくおこたり侍る罪、さり所なうなん。けに残れる菊梨子かいとうなどのかへり咲も、あはれをこめて見給へる御こと葉のいろにおしはかられ侍りてなん。猶かへり返し見まゐらせて、こまかやかなる御かへりとおもひ給ふれと、いとましなければけふのいらへをたにと、ことそき侍るをゆるし給へ。あなかしこ。

霜月九日

よしひさ

さの子君の御もとに

⑮備前の国玉樹子より佐草ふみきよ君へ遣し、消息うつし

みさきの波のうちつけにきこえさせんは、いとなめしう思ほしめすら
めと、ふせやにおふるは、き、のかすならぬ久子をのれをさへ、あね
君の」(12丁オ) 人かましうつとらひ給てしうれしさは、せはき袂に
つ、みかねて、いかて八重雲のあなたにもまうて来て、みものかたり
もうけ給はらまほしうおもひわたりしに、おもひきや中空にかくれさ
せ給ひぬと、中臣ぬしのいひおこせし水茎に、ぬらし、袖は今もかは
きあへす南、御思ひやいかにとおもひやり給へ侍れは、いと、きこえ
んかたなくなむ。をのれもかけと見し心まつのかれ備へては、世をう
き草のよるやなみわかか浦によるとはすれと、あまの子のもくつも
か、す、としを社ふれは、かしこけれとあはれと見そなはし給はなん。
且としころ御あたりの君たちの御ことのはのひかりは、むくらの露も
やてらし給へれと、いかなるまかつみのさわり侍るや、君をはしめて
嶋大人中るしも夢にのみた、一枝をたにかさし侍らす。おもとには四
天王と」(12丁ウ) やらん、世にひ、きたるかた、くも、君ののたま
はせ侍らはと、こたひのたよりにたにさく十ひらさし出侍りぬ。いと
ようこと、り給ひてかい給へらんことを、せちに年きたるに南こは
さ、やかに侍れと、なき君のおまへにたきもの一くさこしをれたるこ
との葉も、うはか心のよろつかひとつをさ、け給ひてん。きこへまほ
しきはあまた侍れと、榮子のおはしましかはとおもふもきりふたかり
て、なみたそ袖のひかたもなきほとにたちあさためぬ鳥のあとかな、
細やかにはのちのたひにきこへさせん。あなかしこ。

文月はての日

さくさ君の

みまへに」(13丁オ)

やすはら

玉樹

⑯安政六未年

中臣君よりかへし

桜柳のゑみ榮えける春の一字ともわすれかたうなん。御家の風のとかな
なれば、いと、めて度おもひ給ふる、けふはふりはへて、咲や此花
の御おくりもの、霞をくめよとの事、こよなうよろこひ侍るを、家刀
自あつくいや聞えあけてよとあまた、ひぬかつきぬ、はた御歌おもし
ろく、とり、其、侍れと、なほつたなき老か心にかくてはとおも
ふむねは筆くはひ侍る。なめしことゆるし給てよ。猶かしこまりはお
ほろ月夜にと申し残し侍り。かしこ。

むつきはしめの日

さの子君」(13丁ウ)

⑰とよ子ぬしのもとへ遣しけり

きさらきの空もさえかへり侍れと、何事かおはしますらん。さいつ比
は、御せうとの君、おほせことありて遠き吾処におもむかせ給ひ、ま
して心もとなうおほしめすこと、おし計り侍りてなん。さては君にも
つれ、におはしますらん折からに侍れは、何くれのまうけも侍らぬ
わかりへ入給は、うれしう南。けふあすとまちくつをれしあまりに、
聞えまゐらせ侍る。何事もたいめ侍りと。あなかしこ。

如月けふ

さの子

とよ子君」(14丁オ)

⑱おなし此清年君より

よへはたいめ侍りて、れいのなか物語、此みしか夜をおもひはからぬ
わさはこのめることのものかたりとおもほしめして、御ゆるし玉へて

よ。大姫君へ聞えまゐらせたる消息、聞えまゐらす。見直し玉はらはうれしうなん。さてなん国のたからてふもの、冊印をまゐらす。はた今市の御母君のは、ことほきはよみいつるさい中にて、またのたよりに聞えまゐらす。いそぎ侍りて。あなかしこ。

さつきけふ

としきよ^下

さの子君のみもとに」（14丁ウ）

①千家殿の大姫君の六十の御賀に清年君長歌をよみ給ひしを見せ給へし折遣しけり

のたまへつるやう、よへはゆるくたいめ給はり、いと嬉しう南。われこそをかしからぬ事いひつゝ、侍りしを、みしか夜もいとせ給はぬけしきしたまうを、おもへはいとくるしくなん。大姫君へまゐらせ給ひし御せう息見せ給へ、いとくうれしう見たるに、めもおよはぬ玉のおてな今見る心地して、いと、かたしけなく。はた、よへ聞えさせ給ひし事わすれたまはて、残の冊印でふもの、ひたちにあらて、八重結帯むすひにもあまれるほと玉はり、これはたうれしうなん。はた御ことしけき中、母かいはひのうたたまはらんとの事、いとくうれしう南。いつにても御心のまにく恵み給へてよ。きこえまゐらせたき事いと」（15丁オ）おほかれと、御つかひのいそぎにとて、たいめの折をまちたる。あなかしこ。

さつきふつか

さの子

清とし君

②おなし比せうそこをかきて清とし君に見てもらひければそれくかたかきしてかへし給ふにそへて遣されける

きのふは折よく雨ふり出て、大麦およひわたまきくさく物のためには、大みめぐみと四方の氏千とせをたたひいつへう聞え侍りてなん。あるしの君は、御かへりいつの日やとそのほとまち侍るのみ。正月よりの消息聞えさせ給へて見侍りて南。かれこれとおもふむねを書くはへて聞えまゐらす。おほやけのふりに思出むふみのさまは、月見とか花見とかのたくひにして、中むかしのふりにも」（15丁ウ）あるへけれど、そは手やすからず、まつつねにかきかよはし玉ふ、大かたこれにてしかるへくきこゆるをや。あなかしこ。

五月けふ

きよとし

さの子君

③たちかへる春の御ことふき、いつかたもおこそかならんとかいなて聞えまゐらす。まつ、その御かたくつゝ、かなうのとかなるみとしをむかひさせ給ひ、かきりなうめてたくなん思給ふる。つきては、此かたことなうとしをつみ南、御心やすくおもひ給へてよ。誠や、ふるとしは何くれとねもころの御けいめいうれしうなん思ひ給ふる。なほくる年も御かけをか、ふりはへらんことをこそ、こひねき侍れ。さては年のはしめの御いはひのへはかりをとて、酒みさかなさ、けまゐらす。なを聞たき事はいと多かれと、春ふかくたいめの折にこそと。あなかしこ。

むつきけふ

御は、君の御まへに

さの子」（16丁オ）

②② 富永君よりかへし

たちかへる春のけしきは千さとをわかぬものから、いかにみやひかにことほき給ふらんと、まつおもひやり聞えさせつるに、をりしもたまひし玉章のひかりしろきのためつ酒などに、軒端の梅もひとしほのけしきそかりて、かつふる雪も豊の幸しるすとならしてとうち出られてなん。はた去年のくゑんしの注書見給ひそめぬるよし、湖月抄とあはせまたまひなは、はやくあきらめ給ひぬへし。されと先生ときこゆる人もかたきふしにいふなる書なれば、まつひとわたりに見給ひて、は、き、の巻をとく見たまひね。しなされため南、五四帖のむねとあるくたり」(16丁ウ)と承り侍る。けにおもしろくも、をかしくも侍るかな、なときこゆるものから、千尋のそのふかきあちはひはいかてかくみしるへき。定家の中納言も源氏みさらむ歌よみはむけのことなり、とかのたまひし。うたまなひのためにもかきりなくいとよきふみになん。さてもこのよろこひはすなはちにもと、おもひたまへなから、ゆるしたまへ。なほ春のいはひは千歳をもかけてとなむ。あなかしこ。

むつき十日あまり

よし久

さの子君の御もとに」(17丁オ)

よしひさ君消息のおくにかきてたまひしうた

天山に春もわかれてたちつらんかすみそめたるあめの香具山

氷りぬし瀧のしら糸とけそめて春の契をむすふ今朝かな

あら熊のうつほのいふきたよりにや雪のみ山はかすみそむらん

かけ霞空にしらるゝ春なからなほ神遠き夜はの月かな」(17丁ウ)

雪はらふ松のみとりのうす霞春のくはゝるほとそしらるゝ、

いかてくとり直し給へ」(18丁オ)

②③ 文久元年よし久君よりかへし

けふはあすはとおもひつゝ、よろこひたに聞へむいとまなく、いつのまにか長月もなかは過にけむ、むらいの罪ざりとこころなくなん。扱もひと日は、めつらしきからくた物、うま酒に、御簫をさへおこせ給ひ、花をふきつゝ、いくたひか香をもめぐらしけん木の芽をにては、世のうさをもわすれ、まかきの菊の千代をかさねたるは、人ことの葉の玉二夜の月はいかに見給ひけんとうかしうおもひやり給へつゝ、おのれはえせ」(18丁ウ)うたゝ、よみ出ざりしそ、くちをしう思ひ給ふる。かへし給ひし和字正濫抄にひきかへめつらしき書をたにおもひ給ふれと、ちりのみつもる文机のあたりには、ことふりたるものゝみにて、しみさへすみかをもとめかちになん。何をかなとわけ見る折しも、松江のかたよりにたにさくといふものに哥かきて給はりければ、そをたにとすなはちまゐらせ侍りぬ。萬代をかねても見なん亀田山なかれをつたふ水くきのあと、いかてまかきの菊二夜の月の哥をも数、見せ給ひなは、いかにうれしからましとぞ。」(19丁オ)あなかしこ。

長月廿日

さの子君御もとに

よし久

②④ おなし君より

いにし月は海原に舟をうかへ、つりする海人もまのあたりにみはやし給ひ、うき世の外のこゝちし給ひしよし、こまやかにさとし給ひ、さこそはこの葉の玉の真玉しら玉おきにへにそこらひろひ給ひけめ、とうけ給はらまほしうおもひ給へ」(19丁ウ)なから、風病にこもりゐなとするほとに、神わさのたひのいそきさへうちつとひて、心よりほかになん過し侍りぬる。その折には山城のこまのあたりにやえ給ひ

ん、めつらかなるものとおこせ給ひしよろこひたに聞へさせず、かさなるおこたりの罪はゆるし給へ。はたあやしう侍れと、ときしくのかくの木毎々のかくなら八千代の春の花も見よ君。なほ萬はたいめ給はりつゝ、とこそき侍りぬ。あなかしこ。

霜月廿一日 さの子君

芳久（20丁オ）

②⑤ 同かへし 椿のちいせき木とみかんを給はりければ

風も折しりかほなるを、何事かおはしますらん。此ほどは、にひなめの神わざに参し給ひしよし、いとく／＼かしこき御事になん。そのつと、めつらかなる物ともめくみ給ふさへ、かたしけなきに、こまやかなる御ことの葉に、玉の緒ものふる心ちしてうれしうおもひ給ふるまゝに、

千代深きかをりか君かたま物のかくの木のみのかくはしき哉
ひかりある君か根引の玉椿けふより千代の花を見すらん
などおかしからねとわらひ給ひてよ（20丁ウ）あなかしこ。

霜月廿二日

さの子

芳久大人の御まへに

②⑥ 又同君よりかへし

いにし月の末つかた、こまやかなる御文有、みつからかものし給ひしひと夜酒を給はりうからつとへまとあて、うつみ火のあたり■よとめく一夜酒、一よに千代もこめてかみけん、このよろこひはずなはちにと、ふてのつかとりし折しも、とみの事とて御つかひのありけるにかき（21丁オ）さし侍りぬ。むらいの罪はゆるしたまへ。さてこの文箱はいとく／＼あやしう侍れと、しつの舎のおきなかおこせたるにて、

まゐらせまほしうおもひ給へしを、いかてかみやひやかなることの葉もそはましかはと、こひつかはしたかは、よへのおとつれに御代を春へと松江のかたよりいひおこせ給ひし、またく／＼なん。いまはことしけて。あなかしこ。

十二月廿日斗り よし久

さの子君御もとに（21丁ウ）

②⑦ 春になりて返し

御せうそこ、一よなから嬉しうなん。御まへにはいとつゝ、まじきたむ酒一夜に千代もこめてなと、御ことのはあやにおもてふせに侍りぬ。はたしつのはあやのおきなのおこせたる文箱てふ物語はりしさへうす氷の御心ならぬを、御代を春へとやんことなき事よりかきそへ給はりしは、哥さへみやひたりけりとみからみ朝夕たのしみつるを、とみに聞へ奉らまほしう思ひなから、いさ、か心地れいならざるにつとひて、年暮のいそきにおこたり侍りぬるまに、めてたき春立ちかへり侍るを、君にはつゝ、かなう御年むかひ給へ、かつはうくひすの初音ももらし給はんを承らまほしうなん思ひ給ふる。はたつゝ、まじう侍れと、れいのこしをれ筆を拭侍るになん、よきに見直し聞直し給ひてよ。猶萬のかしこまりはたいめ給はりてこそ。あなかしこ。

正月十五日よし久大人へ

さの子（22丁オ）

②⑧ 文久二年壬戌春正蔭大人より

くれ行年はそこはかとなくこゝろうつりゆく事のせはしう侍るを、むらさきたちて春たちけるあしたよりは、雪降郷もとけはなるを、何となうそれさへ長閑にて、その梅かしこの柳もいかならんと思ひや

るにつけても、つゝかなう年をむかへ給へること社こよなう嬉しうなん。去年の冬はたれこめて床の山風身にしみ給へるを、いか、おはすらんとおもひ給ふるに、春は春柳の髪もくしけつりおはすよし、かつは三の統の初音もならし給へるよし、さてはおきなさひ」(22丁ウ)たる身にしてはいかばかりうらやましうなん。はた、ありとも君も、此ほとはれいならす、笹の葉陰にこもり給ふよし、とみにとひ参らせたう侍れと、ときは山いつもの事なれば日数さへたち侍らは、また色そふ御けしきに立帰り給はん。されとなのめにすて生へきならねは、いかにも養老の瀧はひかへ給ひよかし。いとくたくしけれと、おもひあまりて御けしき奉らはやと消息し侍りぬ。あなかしこ。

む月九日といふ日

正蔭

さの子君」(23丁オ)

おくに

打かすみ春たつけふのこゝろにはまつみやひたる友そこひしき

②9 同御かたへかへし

こまやかなる御せうそこ、いとかたしけなく見奉りぬ。とにかく寒けはたへかたう侍れと、初春といふ君のみはのとかになん、御かたにはめてたく年をむかひさせ給ひ、殊さら君には、むそちの御賀にさへならせ給ひ、こよなう」(23丁ウ)めてたくおもひ給ふる。おのれもあやふき床をはなれ、打残ほとく絶ふもうれしうなん。はた、ありとも、とそ酒よりたけなはになりはへりしか、れいの事とてきのふからおこたり侍りぬ。こまやかにしめし給ふ事とも、かたしけなく承り侍りぬ。こなたより社とみによるこひをも聞へ奉るへきを、あらたまのとしたちかへるあしたよりゆふへまで、あし引の山の神わさことし

翻刻『かたがたのせうそこうつし』(野本瑠美)

けく、むらいの罪はひろき御心にゆるし給ひぬ。猶かすくのかしこまりは、春ふかくたいめ給はりてこそ」(24丁オ)あなかしこ。

むつき十日

さの子

正蔭大人

花鳥のいろねにわれはくちつみていひかへすへきこと葉もなし

③0 正蔭大人、卯月のはしめ、松江常磐舎におはしましけるをと

ふらひて遣しける

きのふけふとおもふ間に、藤なみも心地よく、あやめなともてはやすころとなり侍るを、君にはいなは山のまつとしもしり給はぬや。されと、御こゝろはさはやかにならせ給ふよし、下枝君にうけ」(24丁ウ)給はり、清年君など打よりよろこひ侍りぬ。内君は重君もやまひおこたり玉ひ、いとくめてたくおもひ給ふる。はたそなたには、は、きふしのかの子またらなるも、おうの海にかけうかへるさま、袖しのうらの藤なみなど、亀田山のけしきよろつすてかたくとも、こなたの浦のいさり火かすかきりなふてらして、くさくさのうを、すなとり夜ともなく物奉とになひはしるさま、いとにきはしくはへるを、君にもとくくかへり来ませかし。長日にそひてまち侍りぬ。聞へまほしき御事多く侍れと、何事もたいめ玉はりてこそ。あなかしこ。

卯月はての日

正蔭大人御まへに

さの子

おいつきて聞へまゐらす。そのあるしの君母刀自君へ、よきにつたひ給へてよ。はたさいつ比は直良の婦にたいめ玉はり、御ことの葉さへもらし玉はり、おのれにとく見せ侍りて、これや大悲の御手の糸のえにしならんと、なま心によるこひ侍りを、おのれもいとく

かたしけなくなん」（25丁オ）

③おなし人より返事

ふりはへての御消息、いとく嬉しうなむ。仰ことありけることく、月日の移りゆくこと真摩矢をはなつやうになんおもひ給ふる。ほとなく葉玉をかけ、あやめふく時になり侍るを、何ことかおはすますらむ、おのれも朝くれつとめ、ほと、きすおちかへる比には、はやもきつきにかへりて、浦のけしき見まほしう、かつはすなとりの鱸の店もの、はたのさもの何くれとてらしましかはとたのしみぬ。はた此ほとは、万葉集にみし奈良の葉の若葉糸の一間にこもりたれこめて、世の人にもたいめせず、亀田山意宇の海もさらに見侍らす。只ひとり机の嶋筆の林にかくれて、つれくなる事はんかたなく折々にて河せうようなとす、めつれと、いとまさらにゆるし」（25丁ウ）給はす。よるは夕日の紅みをかきりに蚊帳に入侍れば、木曾山中のこ、ちなんする。さてさいつ比は直良の婦君にたいめ奉りて何くれと物語なとし侍りしも、君と心とけたる学ひの友なれば、はし弓のはしめてのやうにもあらずなん。かへさにはかならず今市にたちよりてなどの給するも、こよなううれしうなむ。よき便りも何しはあつくつたへ給てよ。かつ風士の友とちへみながらよきに聞へあけ玉はれかし。あなかし。

文月つこもりのゆふつかた

正蔭

さの子の君」（26丁オ）

椎の葉にもものもるやとにあらねとも旅はつらくもおもほるかなし」（26丁ウ）

注

(1) 手銭さの子の事蹟については、下記の論考を参照した。佐々木杏里「手銭さの子と杵築文学」（『出雲文化圏と東アジア』勉誠出版、二〇一〇年）、田中則雄「手銭家蔵書と出雲の文芸活動」（『調査研究報告』三三、国文学研究資料館、二〇一二年）

(2) 注(1) 田中論考

(3) 佐々木杏里「手銭さの子と女性の文学活動」（いづも財団公開講座「出雲俳壇と女性の文芸活動」講演資料、二〇一六年十二月四日開催）

(4) 出雲在住の吉見豊子か（文久四年『玉藻三編料為泰詠草』、慶応二年『元治元年千首』作者）。

(5) 安原玉樹（ひさ又は久子、一八〇六―一八七六）は備中玉島新町に生まれ、備中総社の豪商角清水屋安原儀之助正常の後妻となる。和歌に秀でた。（谷竜介「女流歌人安原玉樹」『倉敷市史』第9冊、名著出版、一九七三年）。

〔付記〕 貴重なご所蔵品の調査をお許しくださった手銭家の皆様、調査にあたり様々にご教示を賜った手銭記念館学芸員佐々木杏里氏に厚く御礼申し上げます。

なお、本稿は山陰研究プロジェクト「山陰地域文学関係資料の研究」（二〇一六―二〇一八年度、代表・野本瑠美）による研究成果の一部である。

A reprint “Katagatanoshosoko-utsushi”

NOMOTO Rumi

(Faculty of Law and Literature, Shimane University)

[Abstract]

The purpose of this paper is to reprint and introduce of “Katagatanoshosoko-utsushi” owned by Tezen Museum. “Katagatanoshosoko-utsushi” is collection of letters which is concerned with Tezen Sanoko.

Keywords : Tezen Sanoko, Tominaga Yoshihisa, Shosoku, Tezen Museum